

第1回シンポジウム—1

趣旨と概要

石井 溥

連続シンポジウム第1回は「南アジアという方法と視角—比較と連鎖—」と題され、その目的は以下のように設定された。

『南アジア』という単位がいかなる学術的意味を持ちうるのか、南アジアを総合的に理解するための方法と視角はいかなるものであるのかについて論じる。また南アジアの地域的特徴を、その内部的な多様性に留意しつつ、比較と連鎖のなかで明らかにすることを試みる。そして南アジア研究の課題と方法について、来し方と行く末を見据えながら、問題提起的に議論を行う。より具体的には、インド学・仏教学、歴史学、アジア経済史、人類学・考古学・民俗文化史、の分野からの発題者の講演を基調に、南アジア研究の将来を展望しつつ深い時間感覚と地域的広がりをもって、学際的な議論を進めたい。まだ実証が必要な構想、未来の研究への希望等をも含んだスケールの大きな議論の中から、これからの南アジア研究の方法と視角が展望できればと願っている。

以上の目的を4時間の議論の中で遂行するために、4人の発題者と2人のコメンテーターを選び、以下のようなプログラムを組み実施した。

・発題者・テーマ（各30分＋質疑10分）

小西正捷（人類学・考古学・民俗文化史）

「南アジア」と「インド世界」—周縁からの視点—

下田正弘（インド哲学・仏教学）

他なる故郷としての南アジア—世界史化された仏教からの問い—

杉原薫(経済史・環境史)

南アジア史にとって「生存基盤の確保」とは何か

栗屋利江(歴史学)

歴史研究／叙述に賭けられるもの—実証と表象の隘路を超えて—

・コメント(各7～8分)

応地利明(地理学・地域研究)

久間泰賢(仏教学)

・司会：石井溥

小西(敬称略、以下同様)は、インド文化の底流および源流を求め多様のインド世界の構造を探る自らの南アジア・インド研究の軌跡を回顧しつつ、「南アジア」の捉え方を地域区分とともに考え、周縁からの視点の重要性を強調する。また「やや周縁とされがちな考古学・民族学・民俗文化史」の視点から、諸学を統合した「南アジア学」を支持・唱道し、同時に「南アジアに学ぶ」方向を確認する。

下田は、仏教が、インド、アジア諸地域において、異教として現れながら、その存在を歴史化させ、また、西洋近代によって世界史という鏡にその軌跡が映じられて以来、失われた故郷を志向する意識的存在へと変じられた、との観点から、他者でありながら起源となる南アジアとは何か、それを希求するものは誰か等を論じる。

杉原は、グローバル・ヒストリーを大きな地域の経済発展径路の交錯として捉え、資本集約型・資源集約型西ヨーロッパに対し、東アジア、南アジアを労働集約型・資源節約型とする。そして南アジアについては、「生存」が「生産」より基本的な課題であり、不安定な自然環境のもと、水の確保や疫病・旱魃等の災害への対処を可能とする「生存基盤確保型経済発展径路」が存在し、それが熱帯の発展途上国や環境問題解決のモデルになり得ると予想する。

栗屋は、南アジア固有の歴史研究／叙述の存否、あり方、国内的・国際的な問題関心・研究潮流との関連性等を問う。そして、サバルタン・スタディーズの位置づけを論じ、近年のインド歴史教科書問題をめぐる歴史家の仕事や歴史認識を検討し、神話・伝承と歴史をめぐる議論に焦点をあてて、南アジア歴史研究の問題と可能性を検証し、「感

情の構造」までを取り込んだ歴史研究のために周辺諸学の共同の必要性を指摘する。

2人のコメンテーターにも指摘されたが、各発表はそれぞれ異なる視角から「南アジア」総体あるいはそれに関わる問題をいかに捉え位置づけるかに留意したものであり、大きくはそれぞれ「周縁」、「原郷」、「生存圏」、「階級的周縁」の言葉で括ることができる。それらは「南アジア」文化・社会・生活の底流を考えるうえでの重要なキー概念となり得るであろう。さらに今回の諸発表・コメントからは、「南アジア」の理解のためには「南アジア」を超える視点も重要であることが確認され得る。